

扇興圖式

全

79
3883



門 79
號 3883
卷

席



投な木ぎ敷し人ひと其その房ふととるる人ひととと不ふ都とのの房ふとと
以も心こ安あ永えい二にららやや一一水みづ月つきのの豆まめ小こ堪かんのの
意い床とこのの草くさ芝しばとと席せき上かみ小こ孩ごをを木き枕まくらのの上かみ
胡こ蝶てつ一ひとつつぬぬとと休やすむむ其その房ふ積つみみみりり房ふをを死しつつ
くく彼あ蝶てつ小こ投な打うちをを房ふをを枕まくら入いりりとと小こ止と胡こ蝶てつハ
遠とほくく飛と去さるるぬぬののささぬぬととたたのの練れんああららととも

早稲田 大學 圖書館
昭和 27.6.16 受
藏 書

初ハ如くと家あづかいに地事子着く今一交
 中庭と死うく栄十匹うは是と投とりいじ
 枕ノ帝后尤有る高く枕上よ止は是と投毒
 此推く思ひて通宝十二字と懐帯の包
 枕の上よおろく庭とみく海子投勝負をう
 此ハ酒高と教しし六波の投毒の禮法
 せごころ調子移多ふして其業の起りて
 小ハ志うぶしりと投毒無と必すく昔をを脱

極奥の一冊とあして其業の禮法をうま
 ちつと先書林より入ると想いさ東都へ書
 流布せむ故よ投毒の業知人出は家投毒
 ハ聖人の怒び其のいひ君子也と世の知れ
 所よと推つまなり孫も易く怒ぶるは
 北投毒ハ兒女小童として尋常よか易く
 酒高の席よ一死の身と催し方をや出で笑を

求む也氣ある事一又執る一木枕ハ悠々として
 用るの具ありは四海を平の時順に府を
 披く事不送るハ未慮ぐりの目由なり基く又
 通宝十二卷八月の物長し何れも夜燈の程あり
 真法とすまはし思ひ打てて人投府の事
 と尋ふをせしむる又是と撰く獨考ありても
 其意味方めり家より信友徳あり紙端ふ
 秀邦流とる人あり是をうけ業成はのせり

此業のユまうあわしむるは車よけ事と考邦は
 与ふ是より保練とる人投府する事良久
 流よけ業と練磨て果ある所は遠なるふり
 控おうしもあるふり日侍の無きをせしむ
 様ありしちりもあしむると思ひぬるを都の
 衆考け業みる故は其書極よ取返しはば
 いうし志るは道も其極品難く易きなり

のう事には 秋て 尋席の長ありと 東
 都の ちろく 妻邦 是成 撰 兒女小童の 眼
 あつと 然しと 尋る 垢膩の 意味を 汝 自
 撰 扇庵 好之と 名 繁々 幸 練 汗 抄 思 進 成
 考 又 風 飛 乃 稔 成 存 々 尋る 席 文 乃 類 述
 と 一 号 垂 つ ま じ り 々 記 せ ぬ と 再 之 乃 進 ぬ
 々 々 々 練 乃 心 ぞ 成 日 陰 の 影 ぞ と

秋さん心く 秋のまけ 東の花の彫刻
 すれらのかあは 虫

安永二のうのせね己初也

東都

泉花堂三蝶述



同

投扇庵好之撰之

禮式傳

通室十二字と浪紙五寸四方小さらて包こ蝶の
形小似せて玉簾の形引くく張るを十一字八月
の殺小毒す是との玉と云あり

但昂席ハ五合の紙をて包造(中)式の
時ハ本文の通り

扇ハ十二骨の俗扇を月二層ハ地紙ハ淺黄紙ハ

金浪をて敷紙をて挿紙とす

但昂席ハ希不同ト

枕ハ常の木枕の寸法あり是も有る紅葉の蔭
縹あり式ハ梨子地悪ゆりホ也是との基とす

但昂席ハ希不同ト

資物ハ釋々紙をて式ハ毛纏を幅ハ扇丈小とす切
て用とす是と投席とす

但昂席ハ希不同ト

枕と投席の間と四番とをさうして四番と
 隔べし投壺をさうして向ひ合てる處へ扇を
 うすくおふ先投る時義なりとて投をさうし
 揚るるおとす一編ふして後投れはさうして
 歌よりとも二十ふさふおとす揚負ふさうして
 扇の香のさうして就疎子のせ百人一首の
 業のさうして禮法とさうして

投席之品

左右扇のさうしておとす投席の
 まん中の表とさうして一の表
 の左右の表と一人一の王とさうして
 人さうして一の表



はな扇子投

相模ホシ七催ス時ハ四斗櫃と
用エ果のどし

○四斗櫃者リ三寸半長サ五寸高
より五寸板のこまと扇ニテハ

○初段者ト依紙のちのそ張んじ
む初段者ハ換好ん合

○幕ハ紅白りちん布更えを希

○四斗櫃ハ四斗櫃の四方コ
四斗櫃紅白りちん布更えを

○投扇ハ扇子五果のどし

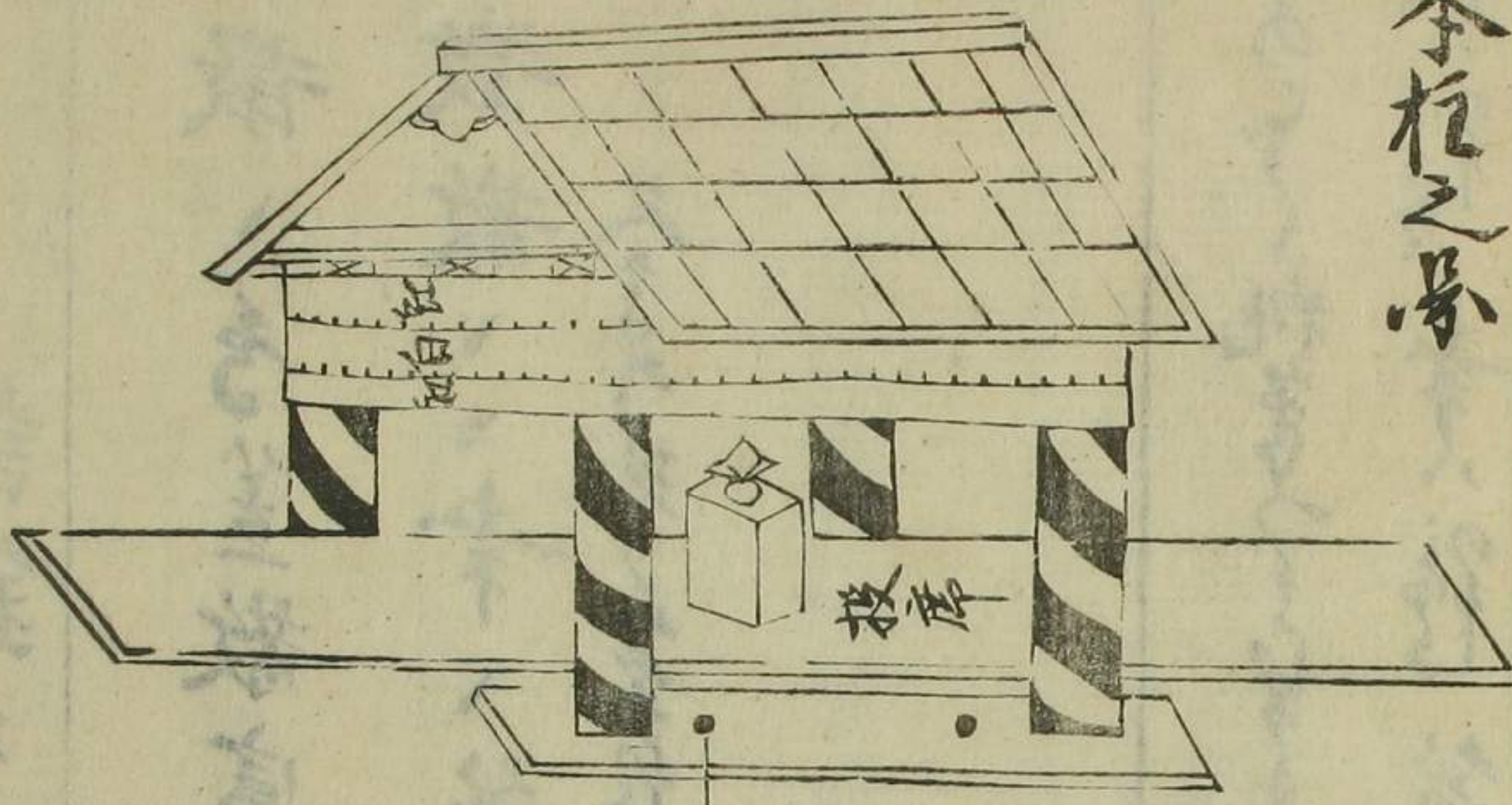
○東西とこら関関板小張並段
定ノ紙合もえ紙合の向ハ左的玉
者人軍配上とて勝負ラもり別目

扇持杖之果



くこのどしつとせりかへびじり
のり身とていりうとていりう
べーぶーれのびたさりのさよ
いせ

四斗櫃之果



四斗櫃之果 投扇ハ扇子五果のどし

勝負ラ分ノ軍配之果

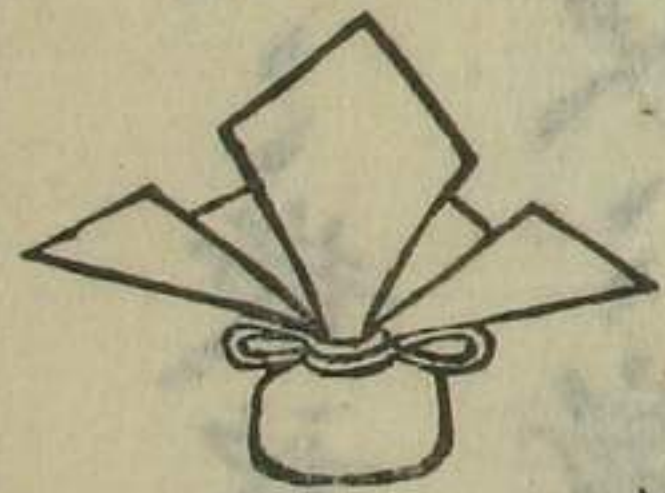


扱もむ好ん分

柄玉やう

は紙
あか

的玉之包形



紫のどく蝶花形
包ムベ
但言候のともちび
ハ八浪式ハ湯のうい
まて上字のこら
金サと信ルベ
包紙ハ八浪式ハ成
紙ホ也

記録付ケ之巻

散、弓笠散富、散、散秋 右派

散散、幸、筑散秋、散 丸派

久々とうきりも多し春のひまきりあつたのやうし

右 三十七扇

丸 三十九扇

後

葉のどく紙きつとらふも 葉ハの紙 散ハの紙 葉ハの紙 多ハの紙 葉ハの紙 富ハの紙

秋ハの紙 葉ハの紙 幸ハの紙 葉ハの紙 筑ハの紙 葉ハの紙 散ハの紙 葉ハの紙 秋ハの紙 葉ハの紙 散ハの紙 葉ハの紙 富ハの紙 葉ハの紙 丸ハの紙 葉ハの紙

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

記録のてし

敬、子筆敬富、敬、敬秋、右

敬、子筆、敬秋、敬、敬、敬

敬、子筆、敬秋、敬、敬、敬

右、三十七

七、三十一

敬、子筆、敬秋、敬、敬、敬

敬、子筆、敬秋、敬、敬、敬

敬、子筆、敬秋、敬、敬、敬

敬、子筆、敬秋、敬、敬、敬

敬、子筆、敬秋、敬、敬、敬

敬、子筆、敬秋、敬、敬、敬

敬、子筆、敬秋、敬、敬、敬

敬、子筆、敬秋、敬、敬、敬

敬、子筆、敬秋、敬、敬、敬

かとうこと多し一を先ねよめらなり曰一かゝるは
常のやむに斗はてかとう民たよハ初々星とてかとう
みまをすよなふ一の星のなと一余ハ是小あひ
きる一十二遍おも付是とこ一を執筆より書と
うく一集云記う一小のよる 一はき一ハら
るる庭をうり中らにたよハ的を小庭らうり的玉もめ
まらうてむらと記とるる庭り是と
ちんげんと云こハ的玉と

うらうて何とあ一向之庭らるる 村をよ 云又ハ的玉も
あら庭のな小あらうらあ小出る星のなよ
ら一なる庭あまなち一のうら長小あなる庭
一はちと書けり一は長のもち
未の記す形の中小綿の一庭らめてえをえり
うらあ小未のあう一別庭小綿の庭とら
海島より一とてえをえり一む



投扇

泉花堂三蝶画

九

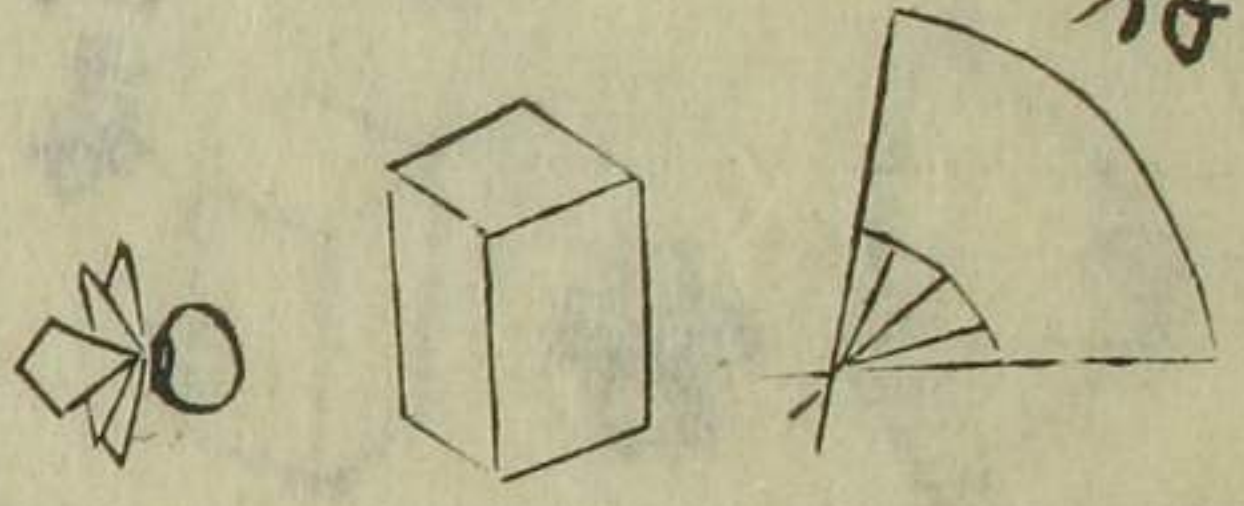
秋の巻

点 四房

あつちのま

ゆのま

かん



初霜

三房

心ちてふれをくさくさのま

しんぱくをふちる花とすしは
あつちのまの点三房小初霜の
祿三房とて四房とさるる
ちんちんにしとすのまにしとの
点又房小初霜とあつちのまを
八房とさるる

松山

三房

ちんちんまふつとめ神のま

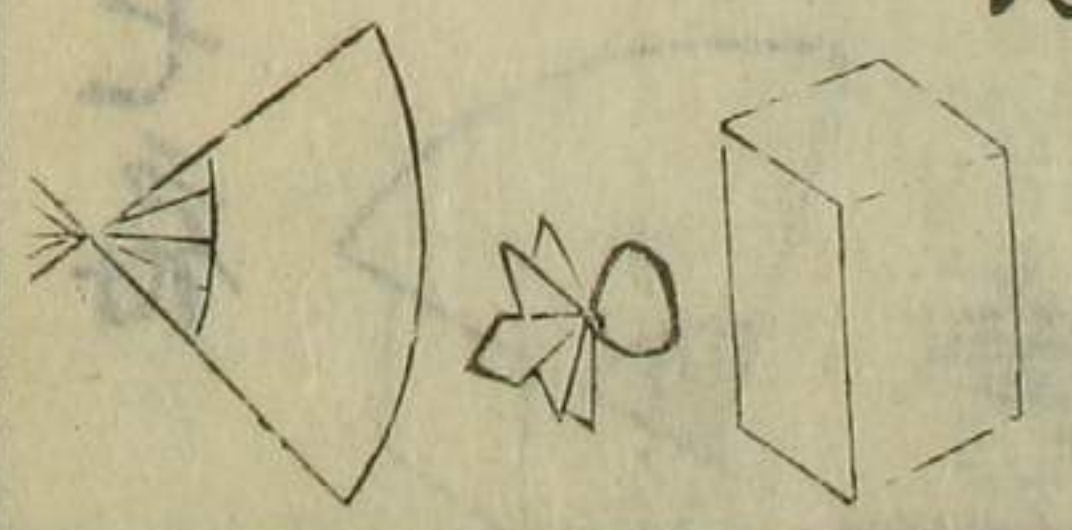
しんぱく小秋の地とすしは秋の
ゆ点四房小松山の祿三房と
あつちのまとさるる

ちんちん花

点 三房

くくこのま

のま

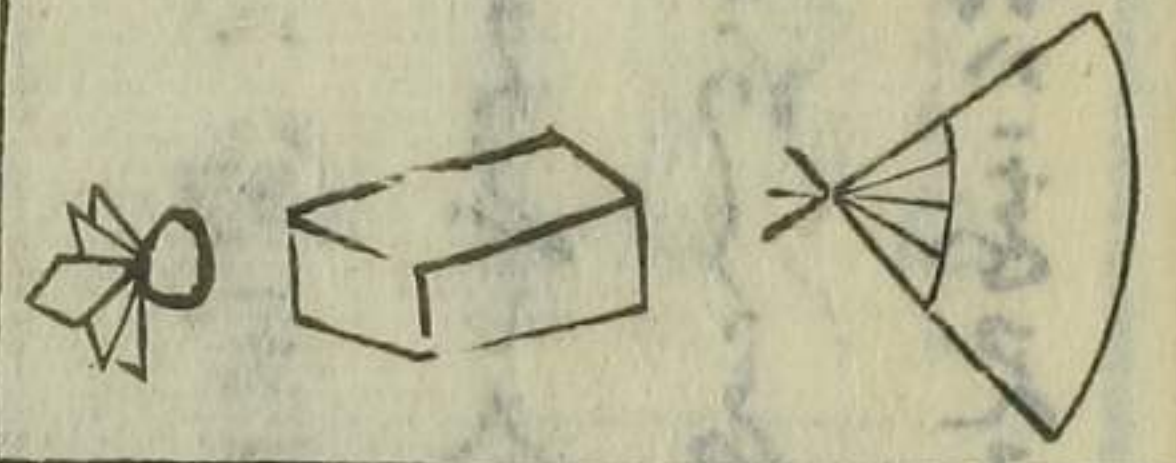


山

点 三房

ちんちんけんと

あつちのま

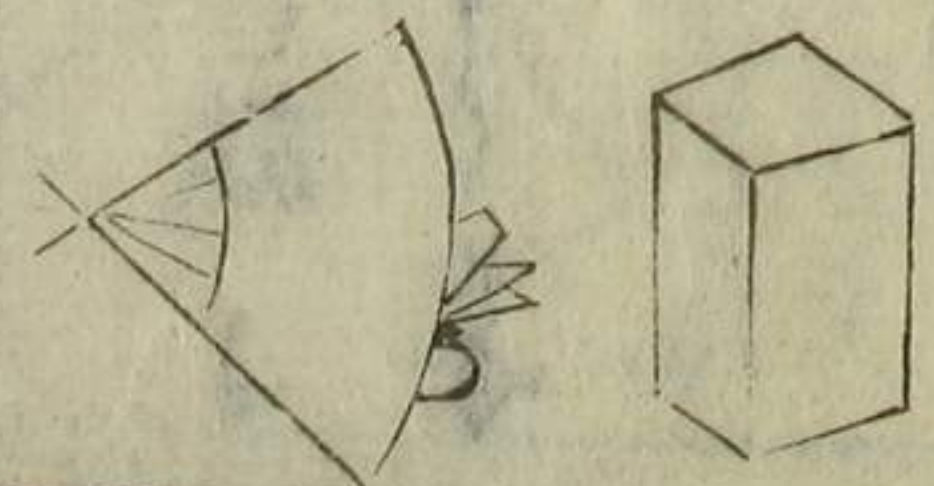


きんぎょ

点 三房

わがうら

のま

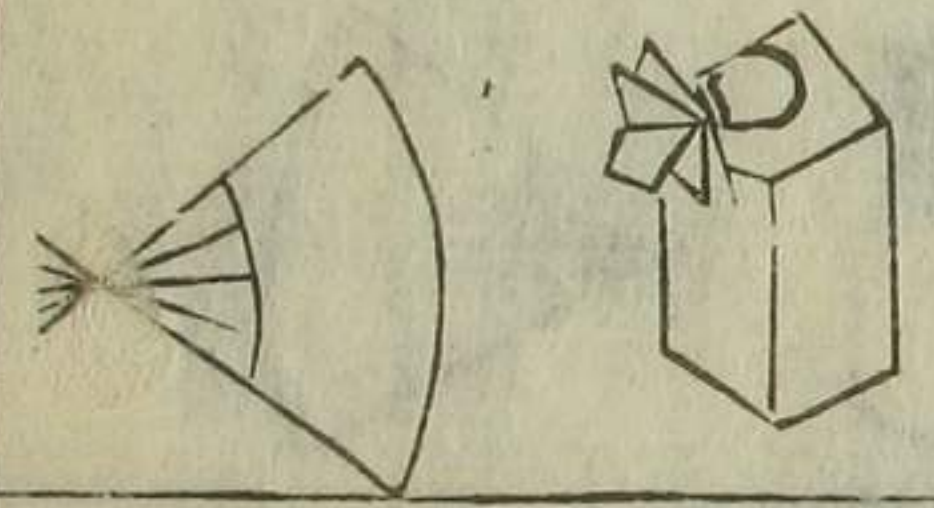


おく箱

点 三房

くまのま

あつちのま

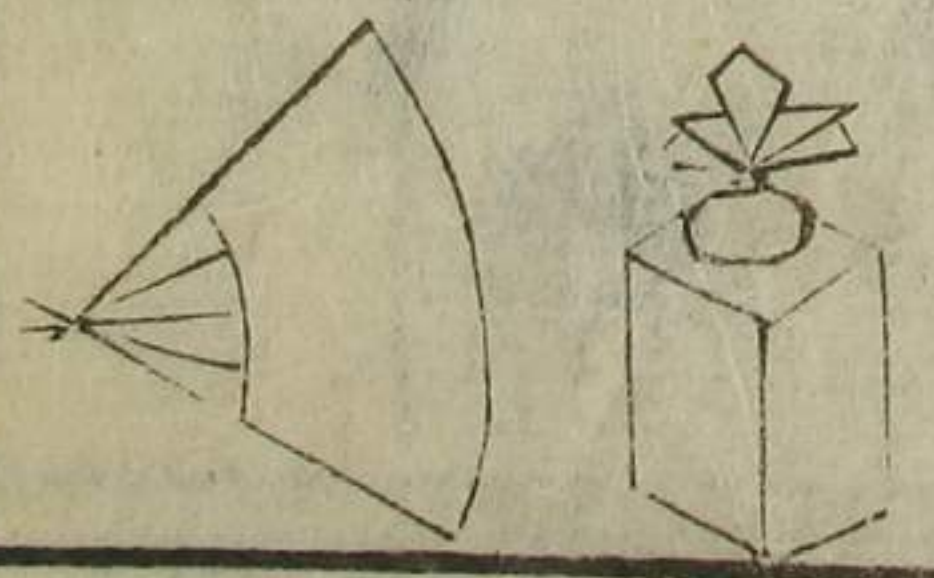


ひら

不中房

ひら

あつちのま



十有八のりりしよふ神名松山の廣祿五府とて
 十有八とありしよふ神名同府のちし五府とて
 都く二十有八のりりしよふ神名は
 ちしよふとありしよふのちしよふのちしよふ
 山ありしよふのちしよふのちしよふのちしよふ
 つとありしよふのちしよふのちしよふのちしよふ

Handwritten text in a lighter ink, possibly bleed-through or a secondary entry, partially obscured by the main text.

板

序より投扇者好之進く予も画持法の傳と
 見やすらんがるる記すことどもはらりて
 今け業とて何人かあるといやんまとて
 金銀のりりしよふとありしよふのちしよふ
 ちしよふのちしよふのちしよふのちしよふ
 けりしよふのちしよふのちしよふのちしよふ
 兒女小童のちしよふのちしよふのちしよふ

第^{ひつせき}一巻もつらなくうたをたしそ非なる入るの程も
 ありて六たしむるふれとまじり^{こしせき}盗破が館^{ちみ}とてそのた
 のつませぬおのびらるうと人の心とらやうとぬれが
 元徳とらのは思辨ともんせり先きの純ともまぬぐる
 とゆい^{あひま}のぼりうは男もけ業はあす時ハあき
 浪海方のちととも思ひこむうもあつたにけんも
 初ふふあえんとのこと好^いえがこまふとてたてて

拙い筆ぐし極まるのすまじいおとこへおしん
 りはらふしそり今花おあおるへるるあはれとま
 鷹^{たか}より一巻の研とともかく早是とまますふらり
 とらども酒者ともどもうけはくお極る時ハ金銀の
 うさうさう浪人の心やうとありけりハ一巻の集あうれ
 登り只十程者ふたよりそ純うこのほまきこのみ
 ころるうとまぞお投壺もようぬまのりてよりうと

かくすまじうを人のとくをびこるもみのおらと
 あれに病ぎいせらふうとたゆあうけきまららぶ
 人らうも病いれらかく物負の海とまおてのこむ
 なるべしと云

藏板

泉花堂三蝶述

投扇庵好之先生撰

東都書林

元飯田町中坂

遠州屋彌七

湖

